

Terumo 社製 Intrafocus WR を用いた wire bias の評価

¹桜橋渡辺病院 心臓血管センター、²桜橋渡辺病院 心臓血管センター

川村 克年¹、岡村 篤徳²、伊達 元郎²、樋口 義治²、永井 宏幸²、小澤 牧人²、岩倉 克臣²、藤井 謙司²、佐藤 洋一¹、岡田 裕介¹、水谷 覚¹、森重 美穂¹、伊保 純一¹、高山 雄紀¹、小坂 祐紀¹

【背景】Rotational Atherectomy は、Debulking 及びModification を目的に、閉塞性病変や石灰化病変に対して有用で、その病変評価は一般的に IVUS にて行われている。しかし、繁用されているショートレールタイプの IVUS では、トランスデューサーと wire が離れるため、標的部位前後の分岐部位の wire bias を正確に評価することは困難である。【目的】今回我々は、terumo 社製ロングレールタイプ IVUS、Intrafocus WR (以下 WR) を用いて wire bias を評価し、その有用性を検討した。【方法】蛇行した模擬血管内で terumo 社製 ViewIT (以下 ViewIT) と WR でそれぞれ pull back し、wire と IVUS カテの位置関係を観察する。【結果】ViewIT では、pull back 前に引きのテンションをかけることにより、bias が大きく生じる部分では、wire とトランスデューサーが接し一致するため評価できたが、それ以外では、離れていた。それに対し、WR は wire とトランスデューサーが接しているため、wire 部分全てを評価することができた。【考察】ショートレールタイプでは、bias が大きく生じる部分の評価は可能であるが、その前後の評価は困難である場合がある。しかし、ロングレールタイプの場合、常に wire と接しているため、bias が大きく生じる部分だけでなく、その前後すべての部分が評価でき、有用であったと考えられる。【結語】WR を用いて評価を行うことにより、burr size の決定や病変部及びその前後 wire bias を評価し、より正確で安全な手技を行うことができると考えられる。